特集　学校インターンシップ

学校現場に長期に関わり多様な学びにつなげる

昨年10月、中教審は「学校インターンシップ」を教員免許を取るのに必要な単位として認めるとする答申素案を示した（必修化は見送り、選択科目となる見通し）。今後の広まりが見込まれる学校インターンシップは、教育実習と違ってどのような効果が期待できるのか。すでに独自の取り組みを進める大学を取材した。

文京学院大学「保育をベースに学校での実践力を伸ばす」

◆幼・保・小をカバー

文京学院大学人間学部では、地元の教育委員会と連携した「学校インターンシップ」を10年以上前から実施している。

「ふじみ野キャンパス」の創設時から地域とのつながりを重視していた同大は、2003年に旧上福岡市、2004年に旧大井町と学校インターンシップの協定を締結。両自治体が2005年に合併して「ふじみ野市」となり、同市と協定が引き継がれた。今回取材した人間学部児童発達学科からは、市内13の全ての公立小学校に数名ずつ学生が送り込まれている。

児童発達学科では、幼稚園教諭・保育士・小学校教諭の3つの免許・資格が取得できる。実践力を重視し、多くの実習系の授業を配したカリキュラムとしているのが特徴だ。

キャンパスには「保育実践研究センター　ふらっと文京」と「ふじみ野幼稚園」を併設。文京区にも併設の「文京幼稚園」を擁する。ここで何度も実習が行われる。授業以外でも学生はいつでも自由に訪れて子供たちとふれ合うことができる。

◆理論とつなげた螺旋型の学び

学校インターンシップ（「社会貢献実習」）は、実習重視の学科の理念に合致した制度として活用されている。学部共通の選択科目で、週一回の活動を半期行うことで2単位が認められる。

毎週の活動内容は学校側と調整して決められる。

同学科4年（取材時）の北川みほ乃さんは、「高学年と低学年の両方を見させてほしいとお願いして、毎週、2年生と5年生のクラスを2時間ずつ見させていただいた」と話す。

一方、同学科4年（取材時）の池田有佑さんは、全クラスで活動を行った。

「それぞれのクラスの先生の要望に沿って、特定の児童を見たり、教壇に立っていっしょに授業を行ったりしました」

その他、運動会や合唱会の手伝い、特別支援クラスのサポート、グラウンドでの体育補助など、活動は多岐に渡る。

同学科の山田喜一特任教授は次のように語る。

「ふじみ野市の教育委員会に感謝していることは、学生を単なる雑用に使わないこと。学生を教育活動のなかに入れて多様な指導をしてもらっています」

実習での多様な体験は、座学での理論につなげていく。人間学部の椛島香代教授は言う。

「学生が学校で経験したり学んだことを教室に持ち帰ってもらい、もう一度それについて考えさせます。理論とつなげてあげることが教員の役割。理論と実習を往復しながら螺旋型で上手に学んでいくことが大事です」

文京学院大学 人間学部
児童発達学科
椛島香代 教授

文京学院大学 人間学部
児童発達学科4年
北川みほ乃 さん

◆保育を土台とした教育

同学科は、カリキュラム構成上、幼・保を学んだうえで、希望者が小学校のことを学ぶ流れになっている。学校インターンシップは、保育の見学実習を経験したあと、2年生から参加するケースが多い。したがって、年齢は違うが、ある程度子供との関わり方をつかんだ状態で学校現場に入ることができる。

池田さんは、「子供の学年は違っても、自分のやり方で伝わるのかどうかを確かめたり、いろいろな発見につなげることができた」と振り返る。

椛島教授は、保育を経験している学生は子供たちと仲良くなるのが上手だと指摘する。それは、「集団の前に立つという感覚がなく、子供たちのなかに入っていくという感覚を身につけているから」だと見ている。

保育を土台に子供たちの関わり方を学べることは同学科の特色だ。小学校教員を目指す学生にとっても、保育の知識は重要であると椛島教授は話す。

「子供の貧困の問題などを考えても、小学校の教員を目指す学生が、児童福祉や社会福祉を学ぶことの重要性を感じます。年齢に関係なく児童の命に関わることとして、保健の科目も大事です。学生たちが早期に学校現場を体験することで、その必要性を肌で感じ、学習のモチベーションにつなげていくことを期待しています」

文京学院大学 人間学部
児童発達学科4年
池田有佑 さん

◆成長を見る視点を持つ

学校インターンシップは、長期に渡って子供と関わることができるが、それによってどんなメリットがあるのだろうか？北川さんは説明する。

「幼・保では短期間で子供の成長を実感できますが、小学校は短期間ではわかりにくいです。けれど、1年間を通して関わることで、当初は先生の話を聞けなかった子供が、1年後にはきちんと聞けるようになったり、成長を観察できます」

これについて池田さんも、「子供たちの成長を見れる視点が持てた」と同調する。

また、「場数を踏んで、いろいろな児童を見られることは、長期のインターンシップのメリット」と北川さんは言う。児童への声かけの仕方やタイミングなど、さまざまな学びにつながる。

池田さんは、こうした学校インターンシップでの経験が教育実習に生きたと話す。

「教育実習では、〝わかる？〟〝どう思う？〟というやさしい声かけで授業運びをスムーズにできましたが、これもインターンシップの成果。教育実習が学校の初現場だったら、きっと〝教えなきゃ〟という意識が強くなりすぎたと思います」

◆地域の関わりを考える

この春から、池田さんは小学校教諭となる。保育士の資格を持つ教員は貴重な存在だ。また、北川さんは当初から目指していた幼稚園教諭となる。小学校の現場経験を幼小連携という視点で生かしたいという。

文京学院大学の学校インターンシップは、地域との深いつながりのうえに成り立っている。地域の学校で活動する学生たちは、生徒や保護者にとって「先生」である。地元の駅を歩いていれば「先生！」と声をかけられる。地域と教育のつながりを身をもって実感することがある。同大の学校インターンシップは、「教育は学校内のことだけではなく、地域や社会とつながっている」（椛島教授）という視点を養っていく重要な機会にもなっている。

早稲田大学「心理テストQ-Uを活用した観察と方法を学ぶ」

◆小・中2校に限定して実施

早稲田大学教育学部教職課程では、「教育インターンシップ」という科目で、学校教育の実際を学ぶ機会を設けている。履修は任意で、週一回の学校現場体験を1年を通して行うことで4単位が認められる。

同課程のインターンシップには、「特別支援学校でのインターンシップ」「小・中学校の特別支援クラスでのインターンシップ」「小・中学校の普通クラスでのインターンシップ」という大きく3種類がある。

このうち、今回取材した早稲田大学教育・総合科学学術院の河村茂雄教授が担当するのは、「小・中学校の普通クラスのインターンシップ」である。インターンシップ科目履修者の約9割が参加するものだ。

以前は、複数の学校に学生を送り込んでいたが、学校やクラスの状況によっては現場経験の浅い学生への負担が大きく、また学生へのサポート体制が不十分になりがちであることから、学校を2校に絞り込んだ。現在は同大と協定を結んだ東京都狛江市の公立の小学校・中学校1校ずつに毎年約20名の学生を送り込んでいる。

学生は曜日ごとにグリープに分かれて活動する。月に一度は全グループが集まりディスカッションを行う。各グループの活動の様子を報告したり、悩みを相談したり、また心理テスト（後述）のデータを活用して今後の対応を話し合う。

サポート役の客員教授が定期的に現場を回ったり、学生の相談にのるなど、学級経営インターンシップの体制作りには手間をかけている。

◆心理テストQ－Uの効果

河村教授が展開する学級経営インターンシップの特色は、心理テストのQ－U（「楽しい学校生活を送るためのアンケート」）の活用にある。このテストのデータから、事前に学校やクラスの課題を把握し、現場での観察や活動につなげている。

Q－Uとはどんなテストか？

これは河村教授が1996年に開発したもので、児童・生徒へのアンケートから、「学級満足度」と「学校生活意欲」を測定するもの。一人ひとりの実態と同時に、学級集団の状態を把握することができる。

2006年頃から全国の学校現場で利用が広まり、現在は約500万人の生徒が利用している。これによって、普段の観察では見落としている生徒の苦しみに気づくことがある。いじめや不登校、学級崩壊の予防など、よりよい教育実践のために活用され、効果をあげている。

河村教授は説明する。

「Q－Uのデータに基づいて、どの層の子供たちに何をするのか、どんな言葉かけが有効なのか、教員全員が共有した形で進めていきます。それによって学級崩壊を予防したり、白けたクラスの雰囲気を活性化することができます。ひいてはそれが学力向上につながるのです」

◆目的を持って学ぶ

学級経営インターンシップの意義は、「目的を持って、何かを修得すること」と強調する河村教授。学生たちにはQ－Uのデータを事前に把握して学校現場に行かせることで、さまざまな学びにつなげている。

「Q－Uのデータを頭に入れておくことで、この生徒は普通に見えるけど、実は〝意欲が落ちている〟〝孤立している〟などのことを観察できます。このようなデータに基づいた観察は大事です。データと観察によってトータルに学んでいきます」と河村教授は説明する。

また、早稲田大学の学生は進学校出身者が多い。荒れた学校を見た経験のない学生もいる。しかし、そうした現場も知ってもらいたいと河村教授は語る。

「Q－Uのデータを頭に入れながら、クラスが崩壊に向かっていく様子や、崩壊から立ち直っていく様子をタイムリーに見ることも大事です。そのなかで、うまくできる先生とできない先生がいる。その違いは何なのか、学ぶことは多いです」

◆生徒と話す機会を求めて

教育学研究科の博士後期課程に在籍する折口量祐さんは、学部4年生から学級経営インターンシップをはじめた。これまで3年間つづけて履修し、現在はTAという立場で、学生たちのリーダーとして指導も行う。最初の参加のきっかけは、教育実習だったという。

「学部4年生の教育実習が、どうしても授業作りに追われてしまい、生徒と身近な生活の話をしたり、悩みを聞いたりするという機会があまり持てませんでした。そこをどうしても取り戻したかったので、学級経営インターンシップを履修しました」

教育実習との違いについては、こう指摘する。

早稲田大学
教育・総合科学学術院
河村茂雄 教授

「学級経営インターンシップでは、学校の全体の活動に関われることができます。1年間通して関わるので、学校行事にも参加できますし、単位取得には関係ありませんが、希望すれば卒業式まで見ることができます。また、Q－Uの観点から生徒を見ることはおそらく教育実習ではできないことだと思います」

◆主観ではない軸が必要

折口さんが現場で感じたことは、主観に頼りがちな観察の危うさである。

「ある生徒の様子がおかしいと思ってQ－Uのデータで見ると、やはり満足度が低かったということもありますが、逆に満足度が高かったというケースもあります。自分の観察と生徒の気持ちのギャップが見えてくることがあります。結局、自分の観察というのは主観でしかありません。そこに留まっていてはいけないんだな、と気づかされることがあります」

また、同じ生徒でも、ある先生の授業では熱心に取り組んでいるのに、別の先生の授業ではあまり取り組まないことがある。すると、先生によって生徒の評価は変わることがある。

「先生によって評価が違うということは、先生同士の情報の共有ができていないということです。先生同士の話し合いの重要性を感じますし、Q－Uなどの別の軸が必要だと感じます」と折口さんは話す。

早稲田大学大学院
教育学研究科 博士後期課程
折口量祐 さん

河村教授はこの点について、次のように補足する。

「子供というのは先生によって全く態度を変えます。それによって先生のその子に対する評価はまるっきり変わります。ここに観察の限界があるんです。ですから、Q－Uという客観的な軸が必要。学生たちには、Q－Uというツールを使って、個人の感情で見立てがぶれないようにする能力を身につけてほしいんです。主観も大事ですが、主観はずれていくので、それをメタ認知していく能力が必要です。それを身につけるためのツールがQ－Uなんです」

◆汎用的な方法論を学ぶ

Q－Uというツールを用いることで、先生個人の特別な能力に頼らない汎用的な方法論を学ぶことができる。旧来型の先生個人の力に頼った学校教育を変えることにつながるだろう。

「たとえ新任教員でも、保護者からの評価は厳しくなっている。新任教員にもはじめから高いレベルが求められるなか、こうした方法論を学ぶことは大きな助けになる」（河村教授）

本気で教員を目指す学生に絞って学級経営インターンシップを行う河村教授。学生たちにはこんな言葉をかけたいという。

「学級経営インターンシップは大変かもしれないが、大変さのなかに見出した喜びがモチベーションのコアになる。大変さのなかに喜びがあるんだということを気づいてほしいですね」

（取材・文／沢辺有司）